

わかくさ・プラザ 開館20周年記念 ほんのいっせき文藝

20
Anniversary
わかくさ・プラザ

三
HONNO-ISSEKI
ほんのいっせき



賞 入賞作品集

関市読書推進実行委員会

目次

はじめに……01

最優秀賞

「いつか、また」小川暢祐……02

実行委員長賞

「煎餅」樋口健司……10

小中学生賞

「僕のさるとらへび伝説」本田彩登……17

入賞作品一覧……24

統計……25

おわりに……26



はじめに

：： 関市読書推進実行委員会 審査委員長 栗山 圭介

人の頭の中は想像力にあふれていて、そこには映像が浮かんでいる。いくつかの記憶だったり、まだ知らない未来だったり、目にしている今の景色とは違う、この星のどこかの「今」だったり。想像の世界では銀河の向こうへも行けるし、大好きなアイドルとデートすることだってできる。

想像の世界の登場人物に言葉をつけたらどうなるだろう。主人公は自分と同じで、へそ曲がりの口下手だろうか。せめて想像の中では気持ちを伝えてもらおう。すると彼女はこう返すだろうし、アイツはこんなことを言いそうだ……。想像から構想へ。そんな遊びどころが小説のはじまりです。想像力は遊び道具。映像の中の登場人物に言葉を託して、思い思いの冒険を楽しんでください。それが地図のない旅だとしても、主人公が先へと導いてくれるでしょう。

私はいえ、しばらく会っていないおばあちゃんに、文章の中で会いに行こうと思っています。どんな言葉をかけるかは、主人公と相談します。

最優秀賞

「いつか、また」

小川 暢祐

一

あなたには、不思議な体験がありますか？

二十五年前の夏休み、国文学を勉強していた大学四年の僕は、京都への旅の途中、早朝の岐阜駅に降りたちました（当時、夜十時に東京を出発し朝五時に岐阜に着く「大垣夜行」という普通列車が毎日走っていました。今の臨時快速「ムーンライトながら」の前身です）。

朝まだ早かったので、僕は歩いて金華山の麓、妙照寺を訪れました。そこは一六八八年の夏、松尾芭蕉が俳諧仲間と連句『蓮池や』五十句を作ったとされる、由緒あるお寺です。

早朝の境内で、当時の情景を想像してメモしたり、石碑の写真をとったりしていると、突然、背後から声をかけられました。

「あの、もしかして芭蕉の『蓮池や』ですか？」

「ええ、卒業論文の調査に来ました。」

「やっぱり。私もなんです。」

ふりむくと、僕と同年代の女性がにこにこして立っています。すこし話をしてみると、

地元の大学に通う彼女とは偶然にも同じ研究テーマとわかったので、その日、一緒に調べて回ることにしました。彼女は歴史に詳しく、話も面白いので、普段は一人でいるのが好きな僕も、珍しく明るい気分になっていました。

「十八楼を命名したのは芭蕉って知ってた?」「芭蕉が鵜飼を見て、『おもしろうてやがて悲しき鵜舟哉』と詠んだのは、ちょうど生類憐みの令がだされた時代だったんだよ。」等々。

長良川の鵜飼を岸から見物した後、岐阜駅でお別れすることになりました。遅ればせの自己紹介をし、一日のお礼を言い、心の中で、「こんな彼女がいたら…」と思いながら連絡先を尋ねてみると、

「えー、恥ずかしいな。名前だけ言うね。琴。家は、岐阜から関に行く途中の町。そうそう、関には芭蕉の史跡もあるし、桜がきれいな春がおすすめ。もしお互いに運命の人だったら、卒業式の後でまた会えるかもね。」

ホームまで見送りに来てくれた彼女の面影を胸に、僕は大垣、米原と乗り継いで京都に向かいました。その日の終電だったことと、翌日が万灯会だったことを覚えています。

二

半年後、僕は愛知県半田市の会社に就職しました。春休みは友達とのお別れ会や引越し、新人研修で慌ただしく過ぎ、関の話はすっかり忘れてしまっていました。

そうこうする内に、一年ぶりのお盆休みがやってきました。社員寮の自室で一人ビールを飲むうち、琴さんを懐かしく思いだした僕は、翌朝、知多半田から急行に乗りました。初めて犬山城を眺め、新岐阜駅で乗り換えて、当時まだ走っていた名鉄美濃町線で、関へ。

途中、琴塚という駅名から、彼女の家はこの辺かなと想像したり、芥見という駅名を興味深く思ったりするうちに、関に着きました。

真っ先に目指したのは、関鍛冶伝承館です。半年前、琴さんは冗談めかして言いました。『蓮池や』は、本当は関が舞台の『関の細道』。ヒントは関鍛冶伝承館にあるよ、と。

確かに、『真鉄ふくけぶりは空に細々と』は、言うまでもなく、鉄を熔かす煙が空に棚引く情景でしょう。

ほかにどんなヒントが隠されているのだろうか。

そんな思いを胸に入館した僕は、ほの暗い展示室にいるもう一人の見学者を目にした瞬間、思わず声をあげました。

「琴さん！ 琴さんですよ、僕です。去年、卒論の調査で一緒に歩いてもらった**です。」

「え？ …あ、わかった！ 琴ちゃんから噂を聞きました。彼女、会いたがってましたよ。」

「えっ、琴さんじゃないんですか？」

「似てる、ってよく言われるの。いとこ同士。」

朝倉詩織と名乗った彼女は、学芸員を目指して勉強中とのことで、「今日は私が案内して

あげる。その代わり、練習台になってね」と、見どころや由緒を丁寧に説明してくれます。

黄色く輝く鋼を、一心不乱に槌で鍛える三人の刀鍛冶の写真パネル。火花が飛び散り、汗が滴り、烏帽子がずれ落ちそうです。

「これが《手杵つく賤がかしらのとけながら もえしさる火にいとどせわしき》。ある本には、餅つきの情景だ、なんて書かれてるけど。」

次は、鞆の取っ手を押ししたり引いたりして、松炭をくべた炉に空気を送っているビデオ。

「ふうふうすうすう」と、笛か秋の木枯らしのようです。「とん、かんかん」という槌音がリズムを刻み、火花が散ります。軟らかい鋼に溝を入れ、折り返していきます。

「どの句のことか、わかる？」

「もしかして、ラストの《木枯に花散庭の笛つづみ 懷紙をつつむ直垂の霜》？」

「あたり！ といっても多分。だってそんなこと、どの本にも書いてないでしょ。」

言われてみれば、卒業論文のために集めた文献では、《神社では社殿の格子を上げて夜神樂が催されていて、折からの返り花が木枯らしに散り、笛鼓の音も聞こえる》という説明だったはず。

それをきっかけに、いろいろな資料を読んでも納得できず、もやもやしていた句の解釈を尋ねていくと、彼女はすらすら答えてくれました。

《古寺の瓦葺たる軒あれて》は、刀を研いで磨り減った砥石が並べてある庭先の情景。

《この里に糲するおとのさらさらと》は、刀を研いだり、朴の木から鞆を削りだしたりする時の、シャツシャツという音の風景。

《蓬生の垣ねに機を巻かけて》は、ざらざらぼつぼつした鮫皮で包んだ柄を、絹の組紐で菱型模様巻いていく様子。

「すごいな！ 言われてみると、本当にそんな気がしてきた。なんでそこまで知ってるの？」

うふふ、と笑いながら彼女は関鍛冶伝承館を出て、今度は郵便局の方へ歩いていきます。

「ねえ、見てみて。」

彼女が指さす先は、左側だけ削りとられた形の山、地図に鼻欠山とでています。そうか、ここが、《土とりに此片山をほりくづし》か！

「年齢は少し離れているけど、芭蕉と円空が仲のいい友達だった可能性もあるの。」

「え、どういうこと？」

「埼玉の春日部市に、奥の細道の旅で芭蕉が泊まったお寺があるんだけど、同じ頃、円空もそこで仏像を彫っていて、二人が出会った可能性が高い、という説は有名よね。でも、その前の年に関で会って、旅の相談をしたかもしれないんだよ。」

そう話して彼女は、十九、二十四句の《秋の風橋杭つくる手斧屑　はかまをかけて薄からする　花盛節供を山にくらしけり　僧のめしくふ鐘かすむ空　高欄にかぶりならびて長閑也蹴あげし鞆に夕日まばゆき》を示しました。

「もう一か所、見に行きましょ。」

本町通りを渡り、山のふもとの弁慶庵へ。芭蕉の弟子・広瀬惟然の記念館に寄ってから、宗休寺、またの名を関善光寺に参詣です。

「芭蕉は、岐阜に來た足で信濃への旅に出て、本場の善光寺に足を延ばすの。その紀行文が『更科紀行』。そして翌年に陸奥への旅。そう考えると、『奥の細道』のリハーサルで関に來たのかもしれない。いろいろなことが、だんだんつながってくるでしょ？」

早いもので、もう夕暮れになっていました。彼女は、本堂を背にして左側にある急坂を、軽やかに登っていきます。鐘楼でやっと追いついて振り返ると、真赤な夕日が遠くの山に沈もうとしているところです。茜色の空の下、薄紫の空氣に包まれた関の街並みが広がっています。坂の上のほうを眺めると、昔、八十八ヶ所靈場巡りをした人々が寄進した石仏が、西日を浴びて、のどかに並んでいます。

三

ヒグラシが鳴く山路で、僕たちは初めて、お互いに向かい合って立ちました。

「この鐘、ついていいんだよ。」

「除夜の鐘じゃなくても？」

「うん。私から鳴らしてみようか？」

深々とした響きが、暗くなり始めた山にこだまします。

ああ、きれいだ。

ふと僕は、二人とも何も食わずに一日歩き回っていたことに気づきました。そして心の中で決めました。僕がつく鐘の最後の響きが鳴り終わったら、彼女を夕ご飯に誘おう、と。

「はい、どうぞ。」

撞木の綱を渡してくれる君。

鐘をつく僕。

鐘の響きがこだまし、木立に吸い込まれていきました。そして、意を決して振り返った時、彼女の姿は、どこにもありませんでした。

・・・・・・・・

歳月が経ち、僕は四十七歳になり、今は大学の非常勤講師をしています。

この夏、二十四年ぶりに関を訪れました。美濃町線は廃線となり、代りにできたらしい幅の広い道路をドライブして、新しくなった関鍛冶伝承館を目指しました。道路標識を見ると、矢印の先に安桜山と書いてあります。「やすぎくら、かな？　きれいな名前だな」と思い、ふとローマ字表示を見ると、Asakuraとあります。

Asakura. アサクラ・・・あさくら！

その瞬間、ついに気づいたのです。彼女の名前「あさくらしおり」を、ずっと朝倉詩織と思

いこんでいましたが、本当は「安桜しおり」だったのだ、ということに。

しおりさん、お久しぶり。あなたはずっと変わらずに僕を見守ってくれていたのですね。

長年取り組んできた『蓮池や』も、あの日あなたに聞きそびれてしまった芭蕉と円空の関係も、ようやく研究がまとまってきました。いつかまた会ってお話しできたら、と思い、頑張ってきたのです。

学術論文というものには、客観的な事実や厳密な考証だけを書かなければならないルールがあります。でも、末尾の謝辞だけは、許してもらおうと思っています。

「本研究に貴重な助言を賜った安桜しおり氏に、心からの謝意を表する。」と。

了

「煎餅」

樋口 健司

関ヶ原の合戦当時の話である。当時の郡上八幡城主・稲葉貞通の家臣に、安東憲道という者がいた。憲道は最初、主君に従って犬山城守備隊に付いた。稲葉貞通は関ヶ原の合戦の際、最初は西軍に付いた。が、勝利の見込みのない事を悟ると、東軍に寝返った。

が、岐阜城の戦いが迫ってくると、主君から数十名の足輕を与えられ、西軍援軍として金華山に赴くよう命を受けた。万が一に備え、他の大名同様、稲葉貞通も二股をかける事は怠らなかった。

関ヶ原の合戦の前哨戦となった岐阜城の戦いは、本戦同様、一日で東軍の圧勝に帰した。憲道は岐阜城の戦いにおいて、援軍の一員として最後まで戦った。が、西軍についた岐阜城主の織田秀信が降伏すると、落人として岐阜の地を離れた。主君の元へ帰ろうにも、戦況がつかめなかった。

憲道は東本願寺派の僧侶に変装し、主君の城のある郡上八幡に帰ろうと決めた。郡上八幡城下には、妻や娘たちもいる。が、東軍が勝利を積み重ねながら進軍してきた岐阜以東の地は、徳川に味方する大名たちによって、厳しい監視下に置かれていた。

西軍兵の残党狩りが、厳しさを増していた。東軍兵のみでなく、落ち武者狩りをする農民たちからも、身を守らねばならなかった。戦いに敗れ、数力所に刀傷を受けていた憲道にとって、郡上八幡への道程は、果てしなく遠く感じられた。

東軍兵によって、西軍敗残兵と疑いをかけられ、身動きが取れなくなった老僧に出会ったのは、現在の藍川橋近くの川原だった。岐阜から長良川を遡っていった憲道は、藍川橋付近で西軍の敗残兵狩りをしている、東軍兵たちに遭遇した。憲道はその場にいた東軍兵たちに、己は郡上八幡に居を構える、浄土真宗・東本願寺派の住職だと説明した。東軍兵たちは、やつれきった憲道を不審そうに眺めてきた。

と、棟梁らしき武将が、読経を命じてきた。憲道は、ゆっくりと阿弥陀経を唱えた。東軍武将は、憲道の力の籠った読経を耳にすると、

「行つてよし」と、川上を指差した。

憲道が一礼してその場を立ち去ろうとした時、みすばらしい姿の老僧が、近くの川原に正座させられているのを発見した。と、その場を去っていかうとする憲道に向かって、老僧が、「御住職様。お助け下さいませ。」と、叫んできた。憲道は、すがるような目をした老僧に近づいていった。一旦、解放されたものの、憲道は、己が疑惑の目で見られている事を悟っていた。逃げ腰で無く、この場にとどまって老僧を助けることが、自分にとってより安全策と判断した。と、東軍武将が、

「知り合いか？」と、憲道に声をかけてきた。憲道は姿勢を正すと胸を張り、
「以前、京の本山で世話になった先達です」と答えた。と、東軍兵は老僧に向かつて、
「爺さん、命拾いしたな。」と、吐き捨てるように言った。老僧は東軍兵に向かつて合掌し、
深くお辞儀をすると、憲道に従って、長良川を関方面に向かつて歩きはじめた。

しばらく行くと、老僧は低い声で、

「ありがとうございました。私は西軍・石田方の密偵。夜になったら闇に身を隠し、大垣城へ
向かいます。貴方様はどちらまで？」と、声をかけてきた。憲道が、

「郡上八幡」と答えると、老僧は、

「かなりの距離がありますな。食料はお持ちですか？」と、心配そうに顔を覗き込んできた。
憲道が、

「恥ずかしい話ですが、ここ数日間、何も口にしていません。」と、苦笑すると、老僧は、
「ちょっと、待っていてください。」と言い、川原の茂みに消えていった。と、しばらくして
憲道の側に戻ってくると、木綿に巻かれた一塊の品を差し出してきた。

「中身は何ですか？」と憲道が尋ねると、老僧は辺りを憚るようにして、

「煎餅です。忍びの者が携帯している非常食です。玄米より長持ちしますし、餅の様に黴が
生えてくる事ありません。近隣の農民たちは、戦乱で飢えています。食料なんてどこにも
ありません。郡上八幡まで行かれるのなら、関の吉田観音に寄って、しばらく休んでいかれ

ると良い。あそこは、東西両軍の負傷兵たちを受け入れています。ああ、この煎餅は長持ちします。吉田観音に着くまでは、決して、口になさらないように。郡上八幡は遠いですから」と言い、憲道に一礼すると、足早に西の方角に去っていった。

憲道は、老僧からもらった包みを着物の胸元に隠すと、川原に下りて行き、長良川の清流を手ですくって喉を潤した。と、急に激しい空腹感に襲われた。今まで緊張し過ぎていたため、横腹や背中に受けた刀傷の痛みを忘れていた。

が、新鮮な水を体内に取り込んだことで、徐々に、正常な感覚が戻って来た。憲道は、未だかつて味わった事の無い、眠気に包まれた。川原の巨石に身を隠すようにして、その場身を横たえた。が、しばらくすると、遠くで落ち武者狩りをしている、農民たちの怒鳴り声が響いてきた。

憲道は川原に群生するススキに身を隠しながら、農具を武器にして落ち武者狩りに目を光らせる農民たちの集団を、凝視し続けた。太陽が翳り始める頃になって、彼らが川下に散っていくのを確認すると、辺りに気を配りながら、再び関方目指して歩き始めた。

しばらく歩くと、空腹の余り、激しい頭痛に襲われた。目が霞み、意識が朦朧とした。思わず、足元の雑草を口にしようになった。憲道は胸元にしまっていた包みを取り出し、それを一気に開けようとした。中には非常食の煎餅が入っており、それを口にすれば、この凄まじい空腹から逃れることができた。

が、憲道は必死の思いで、それを思い止まった。郡上八幡に帰るまで、この先どこで食べ物にありつけるかわからない。黄昏ゆく秋の川原は、暗く澱んでいた。日本を二分する争いに巻き込まれたおかげで、田畑からは全ての作物が消えていた。里山の幸も、総て食い尽くされていた。

憲道は、長良川と津保川の合流地点まで来ると、老僧の忠告に従い、吉田観音を目指す事に決めた。吉田観音の正式名は、新長谷寺。真言宗の古刹で、室町時代からの伽藍も多く、美濃の法隆寺と呼ばれていた。

明治時代の廃仏毀釈の影響で、寺の面積は大幅に縮小されてしまった。が、関ヶ原の合戦当時は、現在とは比較にならない程の広さを誇り、境内では、戦いで傷ついて逃れてきた東西両軍の兵が、分け隔てなく救護された、と伝えられている。

憲道は津保川に沿うようにして、たどたどしい足取りで吉田観音を目指した。津保川沿いにも、東軍兵が屯していた。東軍兵たちは、行き交う船や土手沿いの道を行き来する人々に、鋭い監視の目を光らせていた。

岐阜城の戦い以後、美濃地方における東西両軍密偵の動きも活発化していた。陽の明るいうちに道を行きかうと、東軍兵士に呼び止められ、不必要に尋問を受ける危険があった。また、落ち武者狩りをする農民たちや盗賊にも会いかねなかった。が、津保川沿いを歩く限り、飲み水の確保はできた。憲道は道の前方に数人の人影を発見する度、それらの人物が危険か

どうかを見極め、迂回を繰り返しつつ、吉田観音を目指さねばならなかった。

平和な世の中なら、津保川沿いに半日も歩けば、吉田観音に難なく辿り着けた。が、憲道は、空腹と刀傷の痛みに悩まされながら、気の遠くなるような時間をかけて、目的地に向かわねばならなかった。

吉田観音の三重之塔が見える辺りまで来た時、ふいに目の前に落ち武者狩りの農民たちが川原で火をおこし、川魚を焼いているのに出会った。美味しそうな焼き魚の香りに、憲道は一瞬、我を忘れ、彼らに恵を乞おうかと迷った。が、胸元にしまった包みを握りしめると、足早にその場を立ち去った。

吉田観音の参道まで来ると、東軍兵たちが道端で炊き出しを始めていた。白米の香りが鼻を掠めていく。口の中に、多量の唾液が溢れ出た。憲道は炊き出しの列に並ぼうかと迷った。が、吉田観音の入口付近に屯する、農民に身をやつした東軍の密偵を発見すると、何食わぬ顔をして、山門に近づいていった。

寺の境内においての殺生は、戦国の世と雖も御法度とされていた。よって、境内に入ってしまうと、敵方の兵に手出しはできなくなってしまう。その為、東軍兵たちは商人や農民に変装して寺に入り込もうとする西軍の残党を、門前で炙り出そうとしていた。

憲道が山門を潜ろうとした瞬間、ひとりの遊女に変装した忍びの女が、

「御ひとついかがですか？」と、白い握り飯を差し出してきた。思わず手が出そうになった。

が、憲道は胸の包みを掴むと、

「御遠慮する。さつき腹ごしらえをしてきたばかりだ。」と微笑んだ。すると女が、

「通しておやり」と呟いた。次の瞬間、密かに憲道の脇と背後を固めていた屈強な男たちが、すっと離れていった。

憲道は境内に入ると、本堂を目指した。が、体力は既に限界を超えていた。彼は合掌したままの姿勢で、その場に崩れ落ちた。

薄れていく意識の中で、憲道は必死に胸の包みを握りしめていた。それから三日三晩、死んだ様に眠り続けた。眠りから覚めると水を飲み、粥を啜った。やがて、健康を取り戻した憲道は、肌身離さず、胸元にしまい続けてきた包みを、ゆっくりと開いた。と、中から煎餅は姿を見せず、拳大の薄汚い木片だけが出てきた。憲道は老僧を思い浮かべ、

「ありがとう」と手を合わせた。青く晴れ渡った秋空が、限りなく眩しかった。(完)

「僕のさるとらへび伝説」

本田 彩登

僕の名前は、藤原高光、十歳。変わった名前だとよく言われる。あだ名は、高光公。由来はさるとらへび伝説だ。高賀神社を町探検で訪れる時下調べをした。そこでさるとらへび伝説を知り、その伝説で「さるとらへび」という妖怪を倒した武士、それが高光公なのだ。

高光公と呼ばれるようになって一週間、高賀神社へ町探検に行った。

自由時間。僕はみんなとかくれんぼをした。隠れる側になった僕は、社の裏に隠れた。

・・・なかなか見つけてもらえない。腕時計の針は、もう十時四十分を指している。心配になってみんなを探しに行くが、どこにもいない。すると、一人のおじいさんに会った。そのおじいさんは、浴衣と下駄を身に付けていて、令和を生きる人間には見えない。

「こんなところで何をやとる？早くこっちに来なさい！」

意味が分からなかったが、おじいさんが気になったので、言う通りにした。するとおじいさんは僕の手を強くにぎり、小さな藁の家に引っ張った。

「座りなさい。・・・にしてもずいぶん変わった少年じゃな。」

僕から見るとおじいさんの方が明らかに変わっていると思うんだけど・・・。

「どこの誰だか知らないが、あそこで何をしとった。最近そこでは妖怪が出るんだぞ。」

今どき何を言っているのだろう。そう思ったがとりあえず黙って話を聞くことにした。

「少しは喋れ。名前は。」

「藤原高光です。」

「・・・！」

「なんと！申し訳ございませんでした。妖怪退治の途中でしたか。今すぐ村の者を呼んで参ります。」

「はあ？」

— 十分後 —

十平方メートルくらいの部屋に七十人くらいがぎっしり集まった。

（暑苦しい）

「ずいぶん若くないか？」

「あの武士は美濃で死んでしまったんじゃ・・・」

僕を見て何やらブツブツ話している。

「静かに！」

おじいさんが言った。

「彼こそが藤原高光公。これより高賀山の妖怪退治に参られる。」

（「え？」）

「盛大な拍手と声援で送るのじゃ〜！」

（「え〜！」）

僕に拍手と声援が送られる。何のことかさっぱり分からない上、どう考えても面倒そうなことに巻き込まれそうだと感じ、走って家の裏に逃げた。

おじいさんのいう高賀山の妖怪と言えはおそらくさるとらへび。そしてそれを退治する高光公を僕だと勘違いをしている。なぜこんなことになったか……最も有力な考えは……僕が大昔の伝説となった世界に入り込んでしまったということ？それ以上に考えられそうな答えが見つからない。だとすればもうすぐ本物の高光公が来るはず。ん？じゃあ、僕は妖怪退治なんてしなくていいよな。（ほっ。）安心していいよな。いや、異世界に入ったのだから安心なんてできない。とにかく現実に戻る方法を探さないと……違う……何か違う。僕は何かを忘れている。そうだ！武士が美濃で死んだって噂話！きつとあの武士っていうのも高光公のことなのでは？でも……死んだ？それじゃあ僕の知っている伝説とは違う。それにいくら待っても高光公なんて来ない。んっ？じゃ……やっぱ僕が妖怪退治をしなくてはならないじゃないのか？ここでもし僕が妖怪退治をしないとどうなる？

伝説とは、昔から伝えられてきたもの。実話かもしれないし、そうじゃないかもしれないもの。

伝説がもし実話なら、今僕がさるとらへびを仕留めないと僕の住んでいる時代が、大きく変わることになる。これは運命なのか。

僕は村人から刀と鎧と弓をもらい、高賀山に向かった。その道中の岩屋に着ていた服と秘密で持ってきた携帯を隠した。

険しい山道の中、一人重い刀と鎧を持って登って行く。途中にあった岩屋に隠して持ってきた携帯を置いておいた。戦いで壊れるのが怖かったからだ。そしてついに山頂に着いた。猿のような頭、虎のような体、蛇のようなしっぽ。さるとらへびだ。その目は突き刺さるように光り輝き、血の色のように赤かった。グルル……その姿は、まさに幻獣。そいつは僕に飛びつき、硬い爪で攻撃してきやがった。

恐ろしい。でも、もう後戻りはできない。僕はそう思い刀を強く振った。その刀を蛇の尻尾で捕縛したさるとらへびは再び爪を光らせて襲いかかってきた。だが僕は攻撃される前にその威圧感に押しつぶされた。

「己、噂の高光ではないな。」

とさるとらへび。

「ああ、平成生まれの高光だよオオオオオ！」

この時僕は、さるとらへびがしゃべったことに驚かなかった。それほど妖怪退治に懸命だったのだろう。僕は刀を蛇から引き抜き反撃を試みたが、さるとらへびはその刀を口に

くわえてへし折った。ついに僕は怖くなって逃げ出した。振り返ることもせずそこを立ち去った。逃げた先に見えたのはおじいさんの家だ。僕はすぐその家に飛び込んだ。

「どうされましたか。高光公様。」

「無理だよ！あんなやつとどうやって太刀打ちすればいいんだ。」

「落ち着きください。」

僕は布団を頭までかぶり神様に叫んだ。

（神様、どうしたら僕はあいつを倒すことができるのですか。どうにか……どうにか……）

『ひょうたん。』

どこからか声が聞こえてくる。

『ひょうたん。』

そうか！伝説なら神に祈願した高光は神に「ひょうたんを射よ。」と言われたんだ。それでひょうたんを射ると、それはさるとらへびが化けた姿だったというのがこの伝説の結末だ。なら、僕もひょうたんを射れば……！！

「弓はどこだー！！」

「ここにあります。」

僕はそれを奪い取るように手に取り、力いっぱい弓を引き、目の前にあったひょうたんにねらいを定めた。そして……

ツツピユツ

僕の弓はひょうたんめがけて飛んで行った。

グサツ、コトン。

弓が見事に命中し、弓の刺さったひょうたんが足下に落ちた。それは粉々になり、少しづつ大きくなっていった。そして形が整い始めると、矢が刺さった足が今にもちぎれそうなさるとらへびが現れた。

「改めて問う。己は何者だ。」

僕は何も口にすることができなかった。ここで何か言おうものならば、すべてが変わってしまう気がしたからだ。僕はゆっくりと刀を奴の胸に突き立て、思い切り刺した。そしてそれを大きな箱に入れ、鎖で巻いた。

「ありがとうございます。あとは私達がなんとかします。」

「それでは……」

その瞬間、僕の視界は高賀神社の社の裏に戻っていった。

「それではみなさん、自由時間が終わったので集まってください。」

先生の声が聞こえた。

— 約千年前 —

「高光公様はお帰りになられたのですか？」

入口から村人の声

「あぁ。」

とおじいさん。

「これは未来にも伝えねばならんな。伝説として。」

おじいさんはそう言った。彼を一番近くで見ていた私が未来へ語り継がなければならん。

「私たち最初は疑っていました。こんな若造がそうなのかと。」

「だが彼はやった。」

「あれほどの勇者が未来にもおれば、この世も心配することはない。」

だからこそ私は、息子にもその息子にもこれを語ってやった。その伝説の名は……

— 令和元年 —

この出来事は夢の話だったのだと思う人はたくさんいるだろう。だが違う。その証拠に、岩屋には千年は放置されていたであろう僕の携帯があった。

入賞作品一覧

最優秀賞

「いつか、また」 小川 暢祐（福岡県春日市）

実行委員長賞

「煎餅」 樋口 健司（岐阜県揖斐郡池田町）

小中学生賞

「僕のさるとらへび伝説」 本田 彩登（岐阜県関市）

佳作 （順不同）

一般の部

「円空余話」 高沢 堅信（岐阜県関市）

「故郷」 原 裕之（岐阜県関市）

「手紙」 黒崎 棧（愛知県知多郡東浦町）

小中学生の部

「ビッグセールと兄弟と」 荒川 智哉（愛知県弥富市）

「とある夏の日」 梨華（岐阜県関市）

『ほんのいっせき文藝賞』統計

◆ 作品について ◆

作 品 数 : 75作品

応募者数 : 78名 (市内:52名 市外:26名)

◆ 年齢構成 ◆

10代 … 18%

20代 … 2%

30代 … 16%

40代 … 16%

50代 … 15%

60代 … 15%

70代 … 16%

80代 … 2%



おわりに

・ ・ ・ 関市読書推進実行委員会 実行委員長 北村 隆幸

応募いただいた皆様、ありがとうございます。

正直これだけたくさんの方々からの応募があることを想定しておらず、委員ともども、びっくりしております。

また、もう一つびっくりしていることは、作品のレベルです。今回の文藝賞は、関市のことを入れた作品が入れることが要件でした。こんな身勝手なお願いを許容いただき、作品としての完成度を高めていただけるのが不安でした。しかし、それは杞憂でした。特に、最終候補に残った作品は、それを見事に昇華しているものばかりです。ただ単に、地名として登場するだけではなく、関市の歴史や逸話、場の魅力を深めて作品に取り入れてくださっていました。

審査の過程では、氏名、年齢等の個人情報は一切知らされないままでしたので、この作品は、どんな人が書いているのか、想像するのがまた楽しかったです。妙に地名に詳しい作品は、そこにお住いの人かなとか、淡い恋愛は高校生なのかなとか……。

今、観光は、大型の観光地ではなく、物語に共感して物語を体験しにいくと言われています。関市は観光等の地域外への発信がまだまだ発展途上です。その点において、今回の皆さんの作品は、まさに、関市の財産です。この財産をいただけたことを誇りに思い、今後ものの文藝賞が続いていくことを切に願います。



わかき・プラザ開館20周年記念
ほんのいっせき文藝賞 入賞作品集

発行年月日 二〇二〇年二月十五日

発行 企画・編集 行
関市読書推進実行委員会

〒五〇一―三八〇二

岐阜県関市若草通二―一

電話 〇五七五―二三―七七七七

漫画・イラスト 高木 秀栄

印刷・製本 協同印刷株式会社

※作品集の作成にあたっては、明らかな誤字、脱字以外は原文のまま掲載しました。誤植など不備な点がございましたらお許しください。



私は本の国からやってきた
愛読天使しおり！
読書のコツを教えるよ

その姉さおり
一步進んだ読書の
楽しみ方ならこの私に。

忙しい
あなたには
短編集を
持ち運び便利な
電子書籍で
読むのがオススメ

あなたには
野球選手の
自叙伝！

好きな選手の
生き様が
描かれているよ！

これはドラマの
原作だよ

映像では描かれない
部分が盛りたくさん。
ドラマももっと楽しめるね

あなたも読書の
きっかけを見つけて

素敵な
ブックライフを！

